

異世界人の冒険

叶多

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公の吉野椎歌は女みtainな名前にコンプレックスを抱いていた。

ある日、学校から帰ってきた椎歌はベッドで寝ていた。

目が覚めると何故か砂漠にいた。

そこで出会った、自称勇者のアルポテスと魔王を倒すという、ゲームみtainな展開になり…？

目次

俺と勇者と魔王

飛ばされた俺

自称勇者

1

3

俺と勇者と魔王

飛ばされた俺

「…あれ？」

俺は目が覚めた。

確かに俺の部屋のベッドで寝ていた。

そう確認して見渡した。

ーー周りは、砂漠だった。

俺こと吉野椎歌は…おい、そこ。

女みたいな名前とか言うなよ。

コンプレックスなんだから。

えーと、話戻すと俺は学校が終わってダチと一緒に帰っていた。

そして、眠くて眠くてたまらなかつたから、ベッドで寝ていた。

目が覚めると、砂漠。

「はっ？」

もう一度寝る前の行動の確認をしての一言。

そりゃあ、そうだ。

だつて分かんないからな。

ため息だつて吐きたい。

こんな砂漠で何が出来るの？

それなら魔法が使えたらなと思ひ、大声で魔法の呪文を唱えた。

「…」

漫画なら、椎歌の頭の上にもシーンとなるだろう。

うわっ恥ず！

赤面で慌てて周りを見回す。

よし、誰もいないな。

そう思っていたら…

「ブフオ」

誰かがいた。

「……もし、神がいて俺をどこかに飛ばしたやつがいるなら、一言言わせてくれ。」

「……覚えとけよ。」

自称勇者

吉野椎歌はいらない情報だが、17歳だ。

高校2年が恥ずかしい思いしながら、ゲームでの魔法の呪文を唱えた。
すると、笑い声がした。

「…誰だ」

赤面しながら、尋ねる。

もし、盗賊とかだったらとうしよう。

そんな不安を抱いて…

「ふっふっふー…俺はな勇者だ！」

そういい、勇者は登場…

しなかった。

「どこだよ、勇者」

「ここだ、ヤーン」

素晴らしい声が出た方を向いた。

自分の足下を。

「ここか？」

「そうここだ。助けてくれ」

どこに砂漠に埋まって、見知らぬ人に助けを求める勇者がいるのだろうか。

そう思いつつ、椎歌は掘り出した。

「感謝するぞ、恩人」

そう言った青髪に白眼の少年。

「俺は勇者こと、アルポテスだ。アルって呼んでくれや」

そう言いアルポテスは片手をあげた。

…まるで、知人に会うと「よお」みたいに挨拶する風に。

「それでお嬢さんはいくつかかな？」

質問してきたアルポテス。

それに眉をピクピクさせる椎歌。

少しキレかかっている。

「だ、れ、が、お、じよ、う、な、ん、だ？」

一文字一文字確認するように話す椎歌。

「えっ？君しかないじゃないか？」

そういい、両手をあげる。

…まるで、困ると「やれやれ」と呆れる風に。

「俺は男だあああああ!!!」

砂漠に椎歌の怒声が響いた。

「成る程…吉野椎歌さんだね？」

「君だ」

「じゃあ、椎歌」

「いきなり呼び捨て!？」

「俺のことは勇者と呼びたまえ」

「分かった、自称勇者」

「人の話聞いてた!？」

「砂漠に埋まっている勇者はいねえよ」

そう会話しつつ本題に入った。

「君は変わったら格好してるね？」

「ああ…俺はこの世界の人間じゃないからな」

「何!? それじゃあ、魔王か！」

そう言い自称勇者は、剣を振り回した。

「えっ!? ちよっ、何する！」

「魔王は抹殺するべし！」

「魔王じゃねえって言ってるだろうがあああ!!」

椎歌は自称勇者に拳骨をした。

「いったあああああ!!!」

砂漠に自称勇者の叫びが、響いた。

…こいつと話してたら話が全然進まねえな。